

保健教科書における学習指導機能としての 「話し合い」設問の内容分析

多賀谷 直輝（宇都宮大学大学院）

1. 目的

本研究の目的は、平成元年改訂及び平成 20, 21 年改訂の学習指導要領に対応した小学校、中学校、高等学校の保健教科書における学習指導機能としての「話し合い」設問を抽出し、それらの比較や分類を通して特徴と課題等を把握することで、今後の保健授業での教科書教材の改善に向けての示唆を得ることである。

2. 研究方法

対象とした教科書は、平成元年改訂の学習指導要領に対応した小、中、高の保健教科書のうち、学習指導要領が施行された年から使用された教科書 14 冊と平成 20, 21 年改訂の学習指導要領に対応した現行の教科書 17 冊の計 31 冊である。

本研究では、「話し合い」設問として「～を話し合おう」などと文章表現されているもの、また、「話し合い」などと枠組みされているものを抽出した。分析として、両年の教科書の設問数を校種別に集計し、教科書 1 冊あたりの平均設問数を算出した。また、北俊夫（2017）が提案した「社会科における話し合いの 6 つのタイプ」を参考に保健における 8 つの分類カテゴリー（表 1）を作成した上で、「話し合い」設問を校種ごとに各カテゴリーに分類した。

3. 結果と考察

1) 「話し合い」設問の総数

「話し合い」設問は、平成元年改訂対応版教科書では、87 問、平成 20, 21 年対応版教科書では、101 問抽出された。教科書 1 冊あたりの平均設問数で見ると、小学校（13.5 問→15.0 問）、中学校（1.0 問→4.8 問）、高等学校（0.6 問→2.3 問）と、各校種で増加していた。つまり、平成元年の学習指導要領改訂から平成 20, 21 年の改訂までの約 20 年間で、保健教科書における学習指導機能としての「話し合い」設問が充実してきている傾向がうかがえた。

2) 分類カテゴリー別にみた設問数

小学校の教科書では、両年ともに「①知識確認型」に分類される設問が最も多くみられ、次いで、「②事実探求型」、「④理由探求型」と続き、「⑦課題解決型」も少なからず見られた（表 1）。

表1 小学校保健教科書における分類（度数と％）

	平成元年		平成20年	
①知識確認型	33	(40.7)	31	(41.3)
②事実探求型	16	(19.8)	15	(20.0)
③意思決定型	0	(0.0)	1	(1.3)
④理由探求型	13	(16.0)	11	(14.7)
⑤自己内省型	8	(9.9)	7	(9.3)
⑥価値判断型	2	(2.5)	0	(0.0)
⑦課題解決型	9	(11.1)	10	(13.3)
⑧発信表現型	0	(0.0)	0	(0.0)
全体	81	(100.0)	75	(100.0)

中学校の教科書では、平成元年改訂対応版は「①知識確認型」、「⑤自己内省型」、「⑥価値判断型」で各 1 問ずつであり、平成 20 年改訂対応版では、「②事実探求型」（6 問）が最も多く、次いで「①知識確認型」（5 問）、「③意思決定型」、「④理由探求型」、「⑤自己内省型」、「⑥価値判断型」、「⑧発信表現型」が 1～2 問ずつであった。平成 20 年改訂対応版の中学校教科書の「話し合い」設問は、平成元年改訂対応版からやや増加し、様々なカテゴリーに分類されていることから、多面的な「話し合い」設問の設定が促進されつつあるといえる。

高等学校の教科書では、平成元年改訂対応版から平成 21 年改訂対応版にかけて増加しているものの（3 問→7 問）、半分以上のカテゴリーで 0 問であり、多様な「話し合い」設問が設定されているとは言えなかった。

4. 結論

保健教科書における学習指導機能としての「話し合い」設問は、平成元年改訂対応版から平成 20, 21 年改訂対応版にかけて充実の傾向がみられた。学習内容の知識の確認に関わる「話し合い」設問が多い一方で、思考を働かせるような「課題解決型」などの「話し合い」設問は特に中学校及び高等学校において少なかった。平成 29 年、30 年改訂の新学習指導要領では、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が重視されている中で、特に中学校および高等学校の保健教科書における「話し合い」設問の一層の充実の必要性が示唆された。